新見公立大学紀要　第33巻
pp. 63－68, 2012

研究ノート

基礎看護学実習前の学生プリセプター方式による看護技術指導の効果と課題

杉本　幸枝*・山本　智恵子・土井　英子

看護技術教育

（2012年11月28日受理）

基礎看護学実習Ⅱ前の技術練習において，上級生が下級生に技術指導を行うプリセプター方式を取り入れた効果を検討することを目的に調査研究を行った。対象は上級生である3年生64人，下級生である2年生63人で実施した。回収率は3年生82.8%，2年生93.7%であった。指導時期は，3年生・2年生とも6月下旬が適切であるとの回答が多かった。今後は，2年生が早い時期から取り組み，十分な練習ができる時間的な余裕が必要である。また，次年度以降は基礎看護学実習のオリエンテーションを早い時期に行い，技術練習の必要性を十分認識したうえでのプリセプター方式の技術指導が望ましい。指導する項目は『バイタルサインの測定』ともう一項目は病棟の特徴に合わせた項目とする。3年生が選択することで責任感が生まれてくると考える。3年生・2年生共に次年度も継続を希望していたので，効果的であることが明らかとなった。今年度の課題を改善しながら，継続していきたい。

（キーワード）看護技術教育，学生，プリセプター，指導

はじめに

2002年に看護学教育の在り方に関する検討会報告で「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」[1]が出された。そのなかで，学生に実施する援助内容についての説明能力を十分つけさせるとともに，事前に実践可能なレベルにまで技術を習得させることと述べられている。実践可能なレベルの技術とは，対象の能力をアセスメントし，基本的な手順を対象に合わせて応用することである。臨地実習における学生および教員は，受け持ち患者に対する看護責任を持っているので，臨地実習前の学内練習は重要な意義がある。

看護技術教育は，学内での講義および演習をすることで，その技術を「知る」段階，さらに，練習を積むことで「できる」段階に進化させることができる。「知る」段階は，看護技術の目的を意識し，既習の知識を活用しながら具体的な行為の意味を理解することである[2]。「できる」段階は，行為の意味を繰り返し練習することによってスムーズな動きとなり，基本的な行動から対象に合わせた応用ができることである。看護技術を「身につける」段階では，学内演習だけでは不十分で，繰り返しの練習が必要となる。しかし，やみくもに練習すれば上達するというものではない。そこには，適切な助言や指導が重要になってくる。先行研究では，看護師の新人教育におけるプリセプター方式の指導についての研究は多数[3～6]みられるが，学生を対象にしたプリセプター方式での指導に関する研究は助産実習や成人実習の報告[7～8]以外は見当たらない。

そこで，臨地実習を体験した上級生が臨地実習前の下級生に対して看護技術指導を行うことを試みたところ，効果が明らかとなったので，報告する。

Ⅰ．研究目的

臨地実習前の2年生に対して，臨地実習体験者である3年生が看護技術の指導を行った効果と課題を明らかにする。

Ⅱ．用語の定義

プリセプター方式[9]：指導者，教師のこと。病院などでは，看護系学校を卒業し初めての看護業務につく看護師個々に対して，経験を積んだ看護師の中から指導者を決めて，一定期間一緒に患者ケアにあたる指導方法を取る場合に，この指導に当たる者をプリセプターという。本研究では，看護師に対するプリセプターではなく，学生でのプリセプターとし，上級生が下級生に対して看護技術の指導をすることをプリセプター方式とする。

*連絡先：杉本幸枝　新見公立大学　看護学部　718-8585　新見市西方1263-2

Ⅲ．研究方法

１．研究デザイン

質問紙調査研究

２．調査対象

看護技術指導を行った３年生 64 人および指導を受けた２年生 63 人。

３．調査期間

2012 年７月～８月。３年生への質問紙調査は基礎看護学実習 Ⅱ前の看護技術指導を行った後で，２年生への質問紙調査は基礎看護学実習 Ⅱ終了後に行った。

４．調査内容

筆者らが作成した調査票を用いた。調査内容は，３年生に対しては指導を行った時期，指導した技術の内容，指導方法や準備状況，役立ち度などの 12 項目について，四肢択一および自由記述とした。２年生に対しては前述の内容に追加して，練習した技術項目など 15 項目について四肢択一および自由記述とした。

５．分析

各項目の記述統計を行い，３年生と２年生の捉え方の差を分析する。

６．倫理的配慮

調査対象者に研究の主旨，調査結果を研究以外に使用しないこと，研究への協力は自由意志であり個人の評価や成績評価とは無関係であること，研究に協力しないことで不利益をこうむることがないことを口頭および文書で説明し，協力を求めた。

Ⅳ．基礎看護学実習 Ⅱ前の技術指導の概要

１年次には基礎看護学実習 Ⅰとして，対象者とのコミュニケーションを目的に病院（1 日間）・在宅（2 日間）・施設（1 日間）で，１年間を通して合計４日間の実習を行っている。２年次には基礎看護学実習 Ⅱとして，７月下旬～８月上旬の２週間（8 日間）で病院実習を行っている。初めての受け持ち患者を持ち，援助を通しながら患者の状態をアセスメントし，状態に合わせた援助を実践する。そして，援助が対象にとってどうであったかの評価を通して，さらに援助をするという看護過程の展開実習である。この実習では，既習の知識・技術が重要であり，コミュニケーション技術や援助技術など，基礎看護学実習 Ⅱの前に準備をする必要がある。

看護援助技術に関して，上級生からのそれまでの指導は，「リネン交換」で，前年度に３・２年生共に体験をしている。１年次の課題である「就床患者のリネン交換」の練習を２年次生が指導を行い，最終的に教員が確認をするという形式で行っている。これは本学の前身である短期大学の時から継続的に行っているもので，２年次生は看護技術の想起と指導力の強化を目的に行っている。１年次生は看護技術練習の意義の確認と，上級生との関わりを密にすることで入学初期の不安解消を図っている。

今回，基礎看護学実習 Ⅱの前にプリセプター方式で技術指導を行うのは初めての試みである。その目的は，上級生である３年生は看護技術の想起と指導力の強化，２年生は看護技術練習の重要性の認識と基礎看護学実習に対する不安の軽減である。

基礎看護学実習 Ⅱは，２年次前期で７月下旬から８月上旬の２週間の実習である。３年生への技術指導の依頼方法は，基礎看護学実習 Ⅱの配属部署が決定した６月初旬に３年生に行い，看護技術指導を２年生に行う目的と方法を説明し，了解を得た。また，２年生には看護技術指導を３年生から受ける目的と方法を説明し，了解を得た。看護技術指導の期間は，終講試験などを考慮して６月下旬の２週間とする。

指導項目は，バイタルサインの測定，全身清拭または陰部洗浄の２項目とする。全身清拭および陰部洗浄はモデル人形で実施する。指導項目の選定は，臨地実習で体験することが多く，学生が困難と思われる看護技術[10, 11]のうち，指導期間が限られているなかで実施でき，学生の負担感を軽減させる目的で限定した２項目とした。また，全身清拭は学内演習ではモデル人形を使ってのデモンストレーションのみを行っている。そして，学生同士の演習は時間の都合上背部清拭のみを実施しているので，学生は体験がないためモデル人形を使った全身清拭を指導項目とする。

３年生の指導担当学生は，２年次の基礎看護学実習 Ⅱを行った同じ病棟を担当したが，実習病院の変更に伴い２病棟は異なる部署の２年生を担当した。指導方法は，２年生が練習を重ねた後３年生に指導日時の確認を取り，３年生が２年生 4～5 人の集団指導を行い，技術の習熟度を確認した。教員は３年生の指導状況を見守っている。

２年生はバイタルサインの測定，全身清拭または陰部洗浄のほかに，各自で練習する課題として，環境整備，洗髪，口腔ケア，車いす移乗・移送，氷枕の貼用の５項目を基礎看護学実習 Ⅱの開始までに練習するように指示をした。

Ⅴ．結果

３年生からは 53 人（回収率 82.8％），２年生からは 59 人（回収率 93.7％）から回収した。

１．プリセプター方式について

指導時期について尋ねたところ，図１のように３年生・２年生共に６月下旬が適切であったと回答した人が多かった。「遅い」と回答した３・２年生共に終講試験や課題と重なっているので時期を早めて欲しいという要望が多

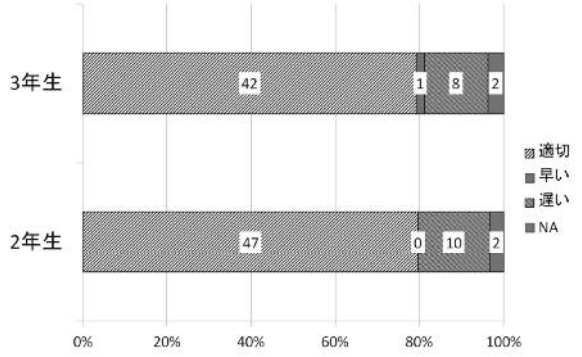

図1　実施時期

かった。

技術指導を実施した項目は，図2–1・2のように「バイタルサインの測定」が3年生は53人(100%)，2年生は57人(96.6%)だった。そのうち，次年度の必要性を尋ねたところ，3年生は52人(98.1%)，2年生は47人(79.7%)が必要と答えた。2年生で不要と答えた人が10人(16.4%)と，3年生と比較して多い結果であった。次に，図2–1のように3年生が全身清拭と陰部洗浄のうち指導をした項目は，全身清拭が29人，陰部洗浄が19人と全身清拭が多かったが，両項目とも指導した人もいた。次年度必要かを尋ねたところ，必要と答えた人は全身清拭27人，陰部清拭16人であった。自由記述のなかに，「病棟の特徴によって違うので，画一的でなくもう一つの指導項目は選択させてほしい」と書かれていた。2年生は図2–2のように，全身清拭と陰部洗浄のうち指導を受けた項目は，全身清拭が41人，陰部洗浄21人となり，3年生と同様に全身清拭が多かった。次年度必要かを尋ねたところ，必要と答えた人は全身清拭38人，陰部清拭21人であった。

次に，病棟ごとの指導について尋ねたところ，図3のように「よかった」と答えた3年生は40人，2年生43人で概ね良い評価であった。しかし，2年生は3年生より「指導する3年生と病棟が違った」と回答した人が14人と多かった。予約の取り方について尋ねたところ，図4のように3年生は「よかった」3人，「普通」36人，「悪かった」12人であった。一方，2年生は「よかった」7人，「普通」37人，「悪かった」1人と，3年生の評価が厳しい結果であっ

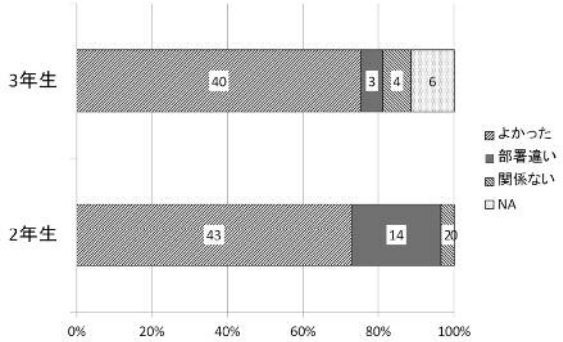

図3　病棟ごとの指導

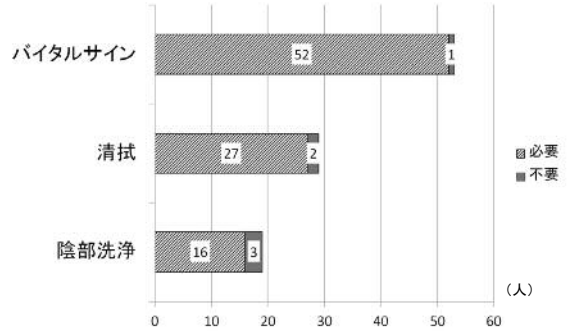

図2 - 1 指導項目と必要性（3年生）

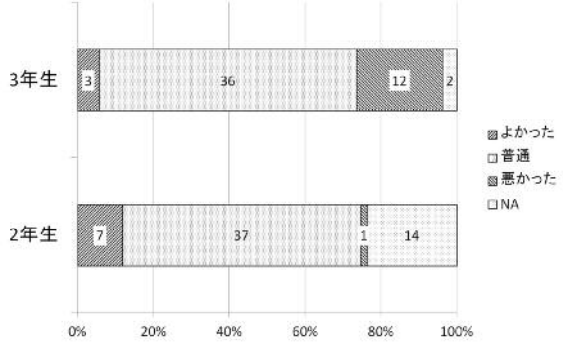

図4　予約の取り方

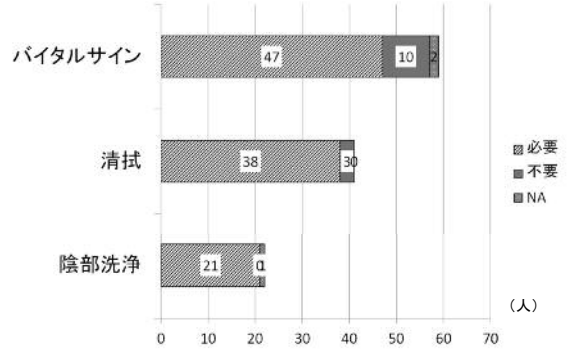

図2 - 2 実施項目と必要性（2年生）

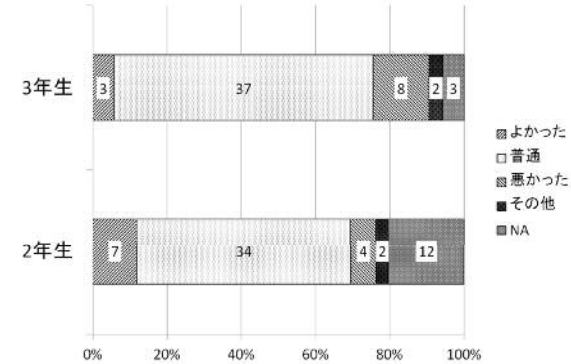

図5　練習状況

た。3年生の自由記述をみると，「自分の予定を優先していた」と書かれていた。2年生の練習状況について尋ねると，図5のように3年生は「よかった」3人，「普通」37人，「悪かった」8人であった。2年生の自己評価は「よかった」7人，「普通」34人，「悪かった」4人であった。また，2年生の取り組みについて尋ねたところ，図6のように3年生は「熱心だった」6人，「まあまあ熱心だった」29人，「まあまあ不熱心だった」13人，「不熱心だった」3人だった。2年生の自己評価は「熱心だった」14人，「まあまあ熱心だった」31人，「まあまあ不熱心だった」3人，「不熱心だった」0人だった。次に，3年生の指導に対する自己評価を尋ねると，図7のように「熱心だった」3人，「まあまあ熱心だった」38人，「まあまあ不熱心だった」9人，「不熱心だった」0人だった。指導を受けた2年生の3年生の評価は「熱心だった」32人，「まあまあ熱心だった」26人と概ね高い評価であった。

技術指導以外での指導内容を複数回答してもらった結果，図8のように3年生が多かった項目は「実習全般」35人，「宿舎について」18人，「看護過程について」11人の順であった。2年生が指導してもらったと捉えている内容は「看護過程」20人，「宿舎について」20人が多く，3年生との認識のずれがあった。

役に立ったかどうかを尋ねたところ，図9のように3年生は「役に立った」10人，「まあまあ役に立った」34人，「あまり役に立たなかった」4人，「役に立たなかった」1人であった。2年生は「役に立った」34人，「まあまあ役に立

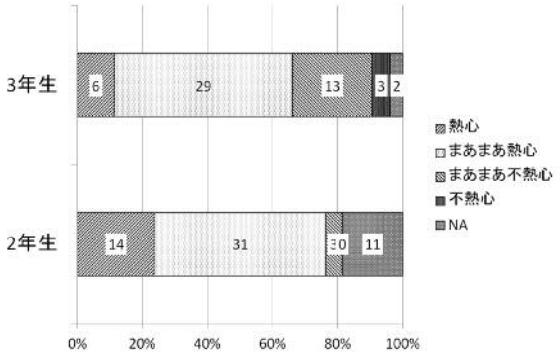

図6　取り組み

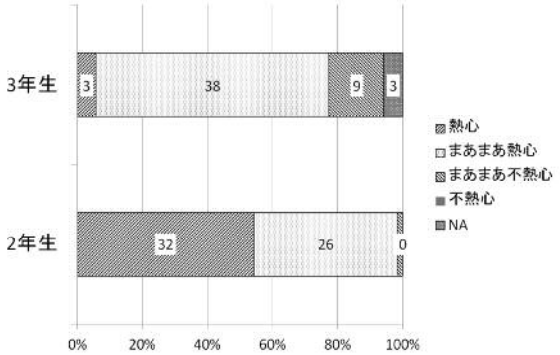

図7　指導の熱意

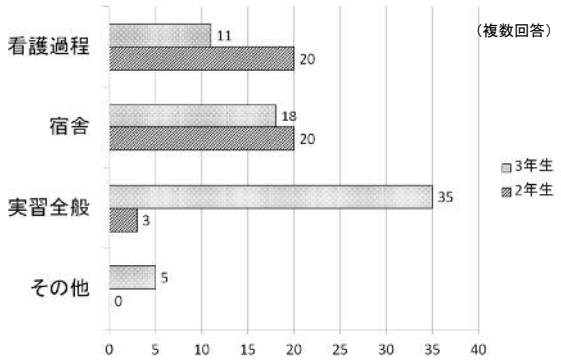

図8　その他の指導内容

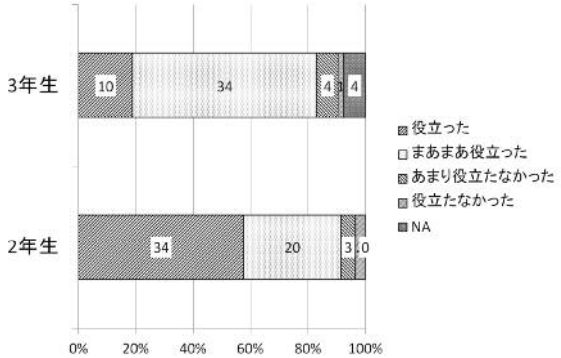

図9　プリセプター方式の役立ち

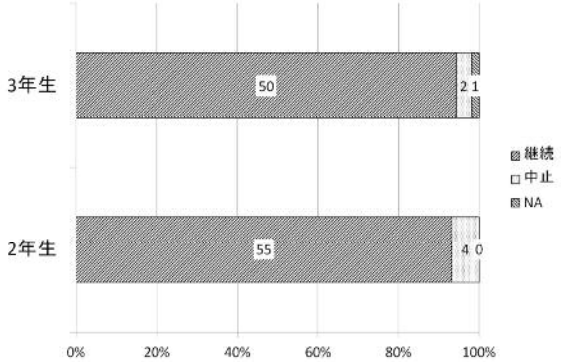

図10　継続の有無

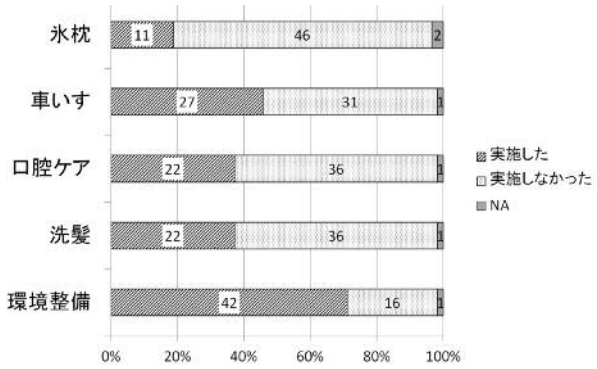

図11　2年生の課題実施状況

った」20 人，「あまり役に立たなかった」3 人，「役に立たなかった」2 人であった。3 年生，2 年生共に役に立ったととらえていた。プリセプター方式による技術指導の今後の継続について尋ねると，図 10 のように 3 年生 50 人，2 年生 55 人とほぼ全員が継続した方が良いと答えていた。

2．2 年生の課題技術の実施状況

バイタルサインの測定，全身清拭または陰部洗浄以外の 5 項目の課題について，実施状況を尋ねたところ，図 11 のように実施した項目で多いものから「環境整備」42 人，「車いすの移乗・移送」27 人，「口腔ケア」「洗髪」22 人で，「氷枕」は 11 人と少なかった。次に 5 項目の課題の必要性について尋ねると，図 12 のように必要性の高い項目は「車いす移乗・移送」「口腔ケア」「環境整備」44 人という結果であった。

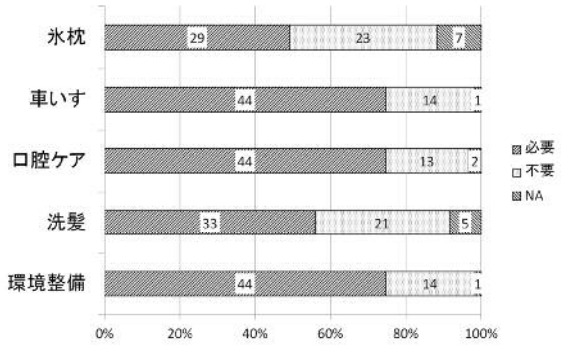

図12　その他の課題の必要性

Ⅵ．考察

1．プリセプター方式の効果と課題

新人看護師教育のなかで導入されているプリセプター方式は，新人看護師が新しい環境になじめずリアリティショックのため，早期離職に追い込まれることを防止し，専門職業人として成長するためのサポートシステムである。今回，看護基礎教育のなかで基礎看護学実習 Ⅱ（2 年次）の前に，初めてプリセプター方式の技術指導として取り入れた。

指導時期については，6 月下旬が適切であったと回答する 3 年生，2 年生とも多かった。しかし，取り組みの熱意や練習状況については，2 年生に対する 3 年生の評価が若干厳しい結果であった。これは，両学年とも課題が多いなかでの実施が影響していると考える。今後は，2 年生の練習が十分でき，その後 3 年生が練習成果を確認する時間的余裕を持たせるために，6 月中旬から下旬と今年度よりも期間を長くする必要がある。また，今年度は技術指導プリセプター方式を導入する説明は行ったが，2 年生に対する実習オリエンテーションができていなかったために，2 年生は実習に対するイメージやモチベーションができていなかった。そのため，実習を体験した 3 年生とイメージができていない 2 年生の間に取り組みの熱意や練習状況に温度差が生じたと考える。次年度以降は実習オリエンテーションを早期に実施し，技術練習の必要性を十分認識したうえでのプリセプター方式の技術指導が望ましい。また，予約の取り方や練習状況について，3 年生はより厳しい評価をしていた。これは，2 年生に対する期待とともに，「2 年生本位である」などの自由記述から，コミュニケーションが不足していると考える。初年度の取り組みではあるが，プリセプター方式の意図をそれぞれに伝え，相互の目的を理解してもらう必要性があったと考える。

指導項目について，「バイタルサインの測定」は両学年とも次年度も必要と回答していた。「全身清拭」または「陰部洗浄」は 3 年生の自由記述にあったように，病棟の特徴を踏まえて 3 年生から項目を指定する方が，3 年生に責任感が生まれ，指導が円滑に行われると考える。

指導担当については，3 年生が前年度に実習をした病棟ごとに 2 年生の指導を行った。この評価は概ね両者ともよいと回答した人が多かったので，効果的であったと考える。しかし，病院・病棟が異なる場合の 2 年生は 3 年生より「指導する 3 年生と病棟が違った」と回答した人が多く，技術指導以外の病院・病棟の情報が得られない 2 年生の不安の表れではないかと考える。2 年生の不安に対して，3 年生は病院・病棟が異なっても実習に対する心構えや意義など自分が体験したことや看護の魅力を十分伝えるように指導していくことが重要である。しかし，2 年生は 3 年生に「熱心に指導してもらった」と捉えており，病院・病棟が異なっても 3 年生の熱意は伝わっていると考える。また，技術指導以外の指導内容をみると，3 年生の多くは「実習全般」についての指導を行っていることが，2 年生の 3 年生に対する高評価につながっていると考える。

役立ったかどうかについては，3 年生・2 年生共に役立ったと回答した人が多かった。また，次年度以降の継続を希望する人も多かったことから，プリセプター方式での技術指導は効果的であったと考える。

2．2 年生の課題技術の必要性

3 年生のプリセプター方式による「バイタルサインの測定」「全身清拭または陰部洗浄」のみでは基礎看護学実習 Ⅱ前の技術練習では不十分と考え，別に 5 項目を指定し 2 年生の練習項目に指定した。実施状況をみると「環境整備」を実施した 2 年生は多かったが，他の項目は半数以下であった。また，基礎看護学実習 Ⅱで次年度に必要性の高い項目は「車いす移乗・移送」「口腔ケア」「環境整備」であったことから，上位の 3 項目に限定し学生の負担を軽減した方が実習前の実施率が向上すると考える。

謝辞

この研究に協力していただいた３年生，２年生に深く感謝したします。

文献

１）厚生労働省：看護学教育の在り方に検討会報告．2002.
２）川島みどり：看護の時代３　看護の技術と教育．勁草書房，104-107，2002.
３）小野寺舞，内田宏美，津本優子，他：新卒看護師の職場適応とその影響因子に関する縦断的研究．日本看護管理学会誌，16(1)，13-23，2012.
４）寺山範子，佐藤幹代，森祥子，他：新卒看護師の看護実践における個人的取り組みとそれを支える教育背景．東海大学健康科学部紀要，17，79-80，2012.
５）山口昌子，笠家ゆかり，段子建年，他:プリセプターシップを支援するスタッフ看護師の新人看護師教育に関する意識と行動．日本看護学会論文集（看護教育），42，169-172，2012.
６）松本美知子，吉本千鶴，中谷喜美子，他:プリセプター研修の評価　プリセプターチェックリストの自己評価結果より．日本看護学会論文集（看護管理）42，87-90，2012.
７）阪本喜代子，中村喜代美，梶間敦子：助産師教育　助産基礎実習におけるプリセプターシップ導入の効果．日本助産学会誌，23(3)，445，2010.
８）押鴨由香，桐生由美子：成人看護学実習におけるプリセプタード実習を実施して．日本看護学教育学会誌，18，166，2008.
９）小倉一春：看護学大辞典　第５版．メヂカルフレンド，1902，2002.
10）杉本幸枝，土井英子：基礎看護学実習Ⅱにおける学生の日常生活援助技術の困難さの分析．新見公立短期大学紀要，29(2)，19－24，2009.
11）杉本幸枝，山本智恵子，土井英子：基礎看護学実習Ⅱにおける臨床での援助技術の困難さの実態．インターナショナル Nursing Care Research，10（4），99－105，2011.

Effects of technical training in nursing incorporating the student preceptor system, conducted prior to basic nursing training, and related problems

Yukie SUGIMOTO, Chieko YAMAMOTO, Hideko DOI
Education on nursing techniques, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi,Okayama718-8585,Japan

Summary

A survey study examined the effects of technical training incorporating the preceptor system, in which senior students provide juniors with technical advice, conducted prior to “Basic Nursing Training II”. Subjects were 64 third and 63 second year students. The response rate among third and second year students was 82.8 and 93.7%, respectively. Both third and second year students considered late June the most appropriate time of preceptor teaching. It is necessary to allow second year students to prepare themselves earlier and take time to undergo thorough training. It is desirable to provide orientation for basic nursing training at an earlier period of the following year, so that they can implement and receive preceptor-based technical training with a sufficient understanding of its necessity. One specific subject of advice is “measurement of vital signs”, and another should be selected by third year students according to the characteristics of the hospital ward, which is expected to develop their sense of responsibility. The effectiveness of preceptor-based technical training has been supported because both third and second year students hoped that they would provide or undergo it the following year as well. We hope to continue to organize it while addressing the problems identified during this year’s training session.

Keywords: education on nursing techniques, students, preceptors, training